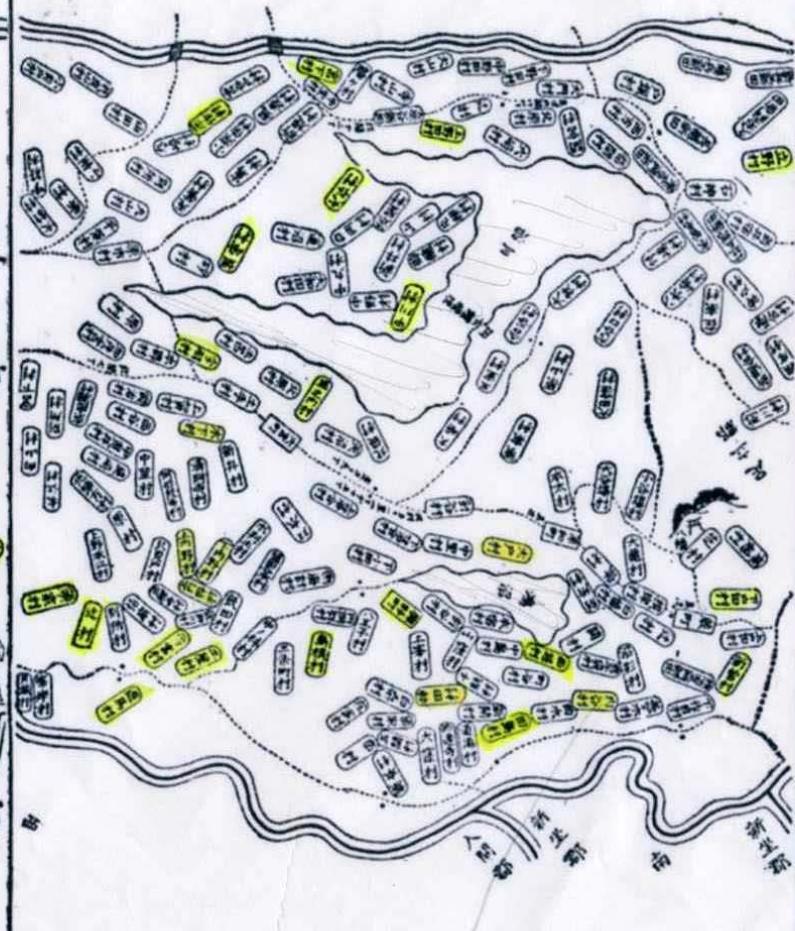


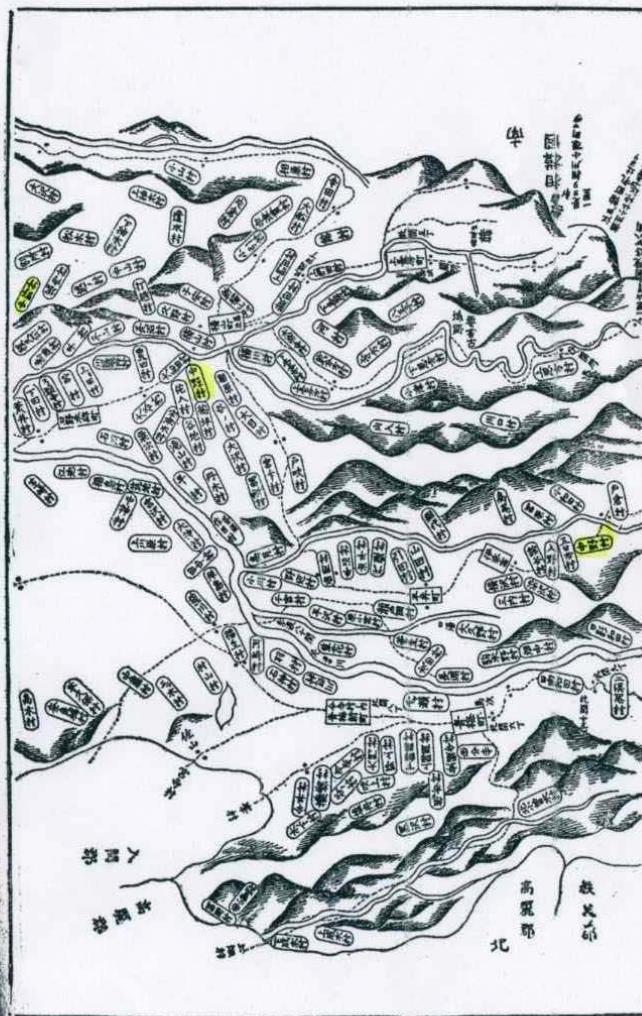
新編武藏風土記稿卷之百三十五 足立郡之一



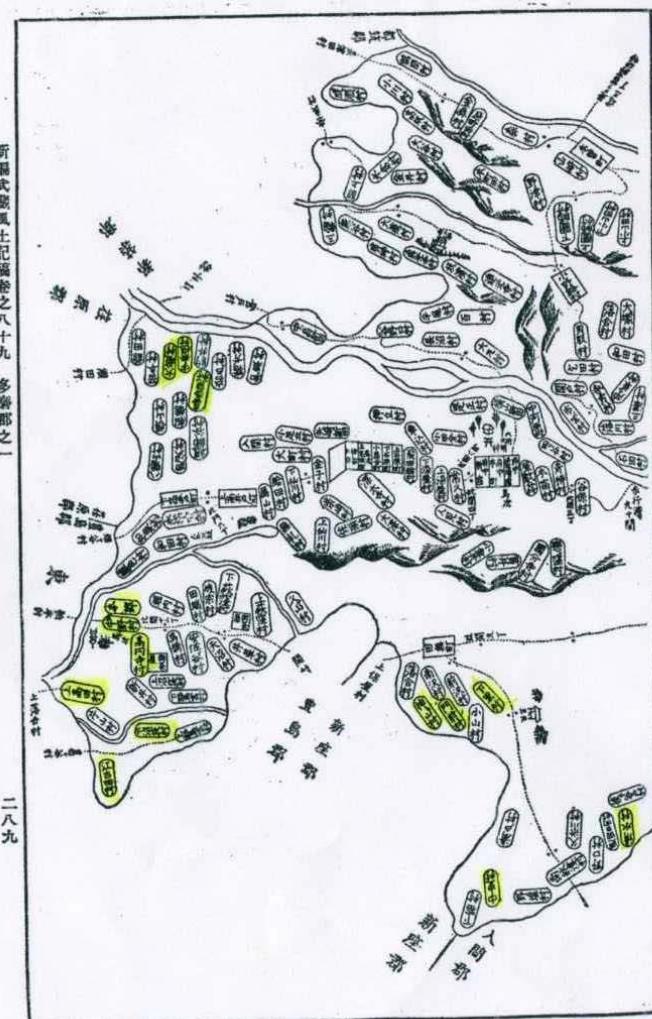
新編武藏風土記稿卷之百三十五 足立郡之一



新編武藏風土記稿卷之八十九 多摩郡之一



新編武藏風土記稿卷之八十九  
多摩郡之一



二八九

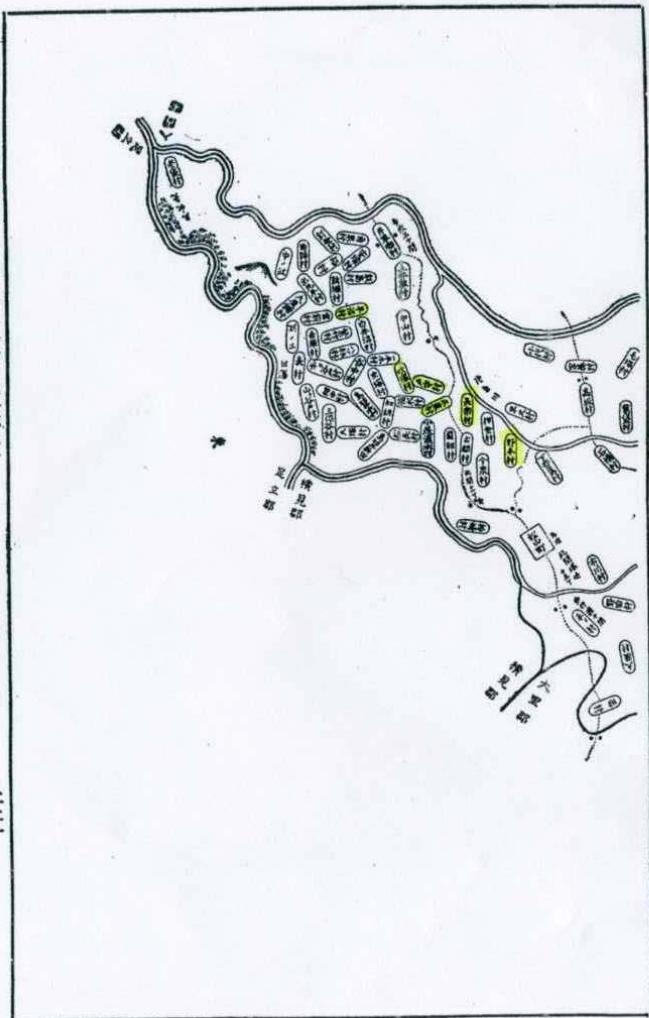
新編武藏風土記稿卷之百八十六  
比企郡之一

正保年中改定圖



一一〇

新編武藏風土記稿卷之百八十六  
比企郡之一



一一一

## 新編武藏風土記稿卷之百卅五

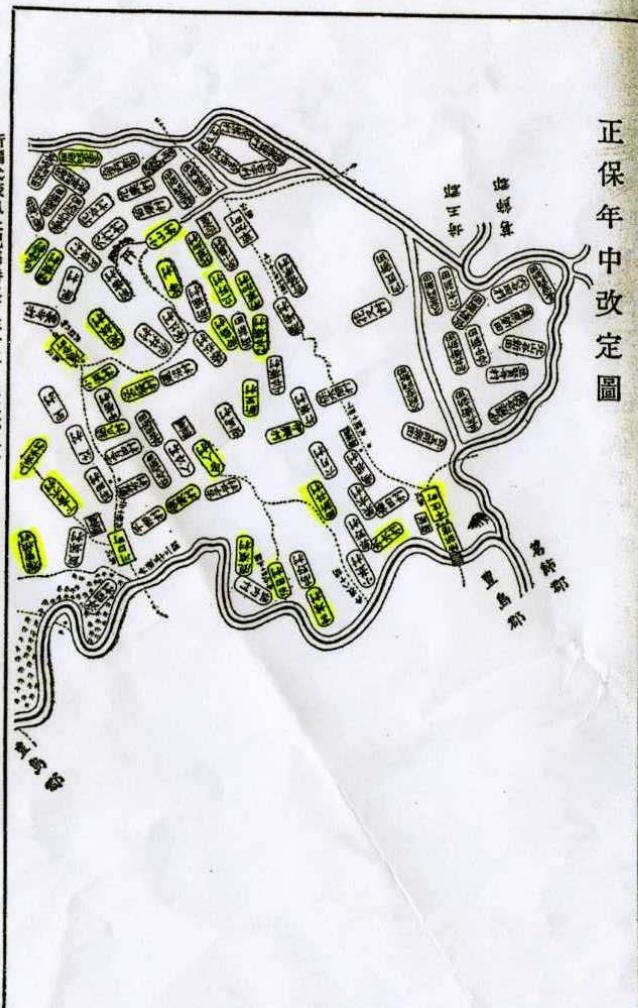
### 足立郡之一

#### 郡圖

#### 總說

足立郡は國の中央より東北の間にあり、江戸より北の方二里半に當る。「倭名抄」國郡の下に足立を訓して阿太知と註す、其名は知べからざれど、陸奥國にも安達と云る。郡名あれば、文字は假借にしてあだちと云る。古言の義はいよいよ論じかたし、其名の起れる地も今は唱を失ひたれど、「神名帳」に足立神社あれば、當時足立本郷ありて其地にたてりし神社なること知るべし、今は彼神社の舊趾さへ慥に知べからず、郡の方位西を上とし東を下とす、其東は葛飾郡・埼玉郡の一郷に境ひ、大抵古隅田川を限とす、南より西を上とし、荒川を界として豊島・新座・入間・比企・横見の五郡に跨り、北は大里・埼玉の二郡に隣。

る、其大里の界は地續にて、埼玉の限は元荒川・綾瀬の二流延亘す、闐郡界より乾へ地先長く張出せり、葛飾郡の界より大里の界まで長凡十三里、横は東の方千住宿の邊まで一里半、それより西へ上れば次第に廣くなり、中央には繩一里半に至り、又すばまりて大里郡の界にては繩一里半に過ず、郡界かたの如く大河の流を帶ねれば、古の地域大抵變革なきが如くなるべけれども、當國「風土記残編」當郡の下に云、東限北河越西限依田川、南限石川八幡、北限箕輪川・小名山・所七箇小岡・所七箇河・三流川・五派泉・三磯池・所九箇原・所六箇宮祠・箇所十二寺院・宇・墳墓・六基云々、爰に云る四界の地名今皆唱へを失へり、たゞ綾瀬川の邊埼玉郡の内に妻輪村あれば、妻輪川と云は綾瀬川の事なるべし、此の當「風土記」は「出雲風土記」の類にはあらで元より大寶天平の古書の體例にあらざることは世にも論なれど、正史實錄の照應あり、又奥書に文明の年號あれば、何様にも當時古書の殘簡など採輯して、綴りしものと覺ゆれば、参考に益あることは凡例にも辨せしごとなり又「風土記」の文に足立府公數二百八十二東三毛、田假栗百二十七丸、出驛用云々、當郡に府を置しことは他の所見なきことなれど、今大宮宿の邊其古蹟なりなど土人も云ひ、又古書によりて考るに、實に然るべし



新編武藏風土記稿卷之百八十六 比企郡之一

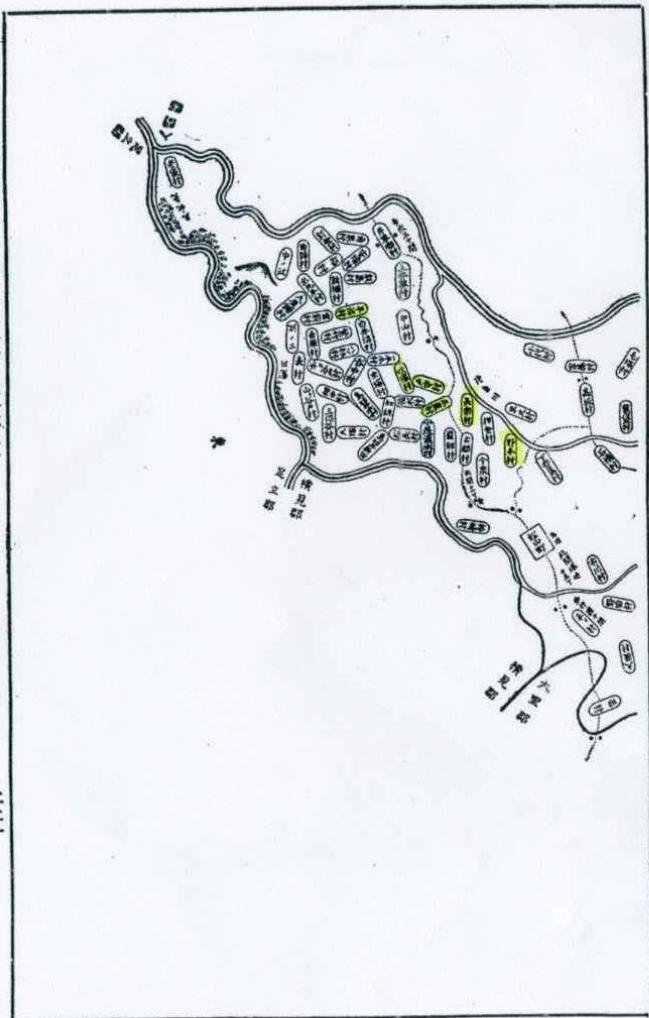
一一〇



新編武藏風土記稿卷之百八十六 比企郡之一

新編武藏風土記稿卷之百八十六 比企郡之一

一一一



# 新編武藏風土記稿卷之百卅五

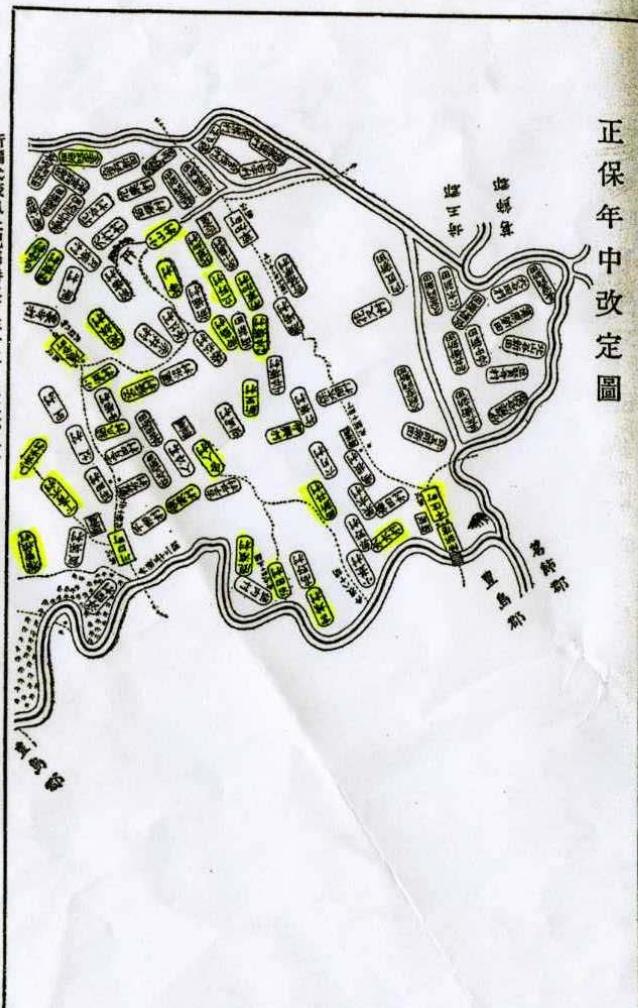
## 足立郡之一

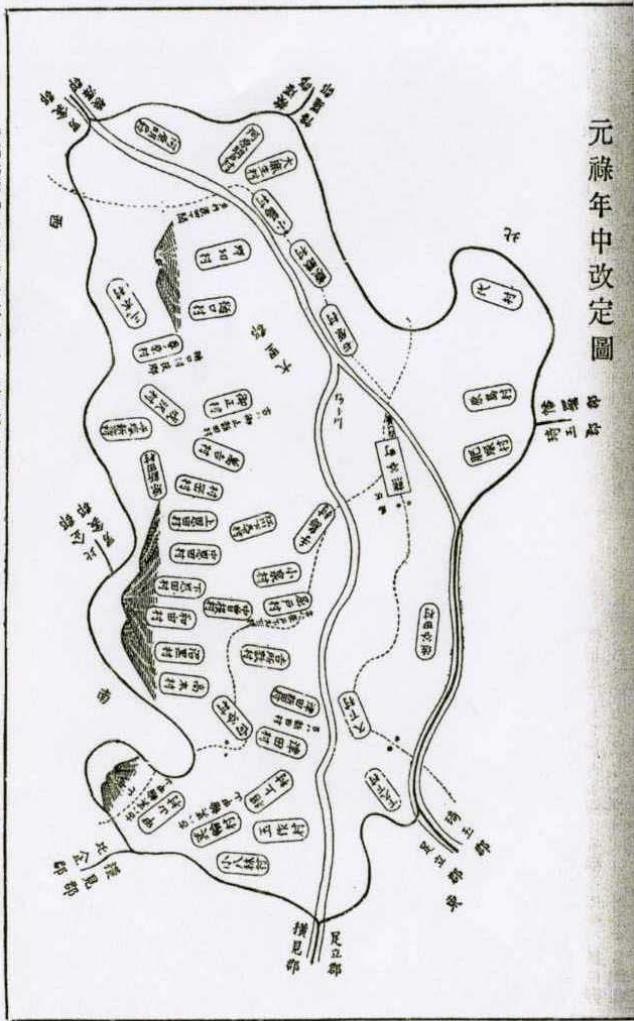
### 足立郡之一

#### 郡圖 總說

足立郡は國の中央より東北の間にあり、江戸より北の方二里半に當る。「倭名抄」國郡の下に足立を訓して阿太知と註す、其名は知べからざれど、陸奥國にも安達と云る。郡名あれば、文字は假借にしてあだちと云る。古言の義はいよいよ論じかたし、其名の起れる地も今は唱を失ひたれど、「神名帳」に足立神社あれば、當時足立本郷ありて其地にたてりし神社なること知るべし、今は彼神社の舊趾さへ慥に知べからず、郡の方位西を上とし東を下とす、其東は葛飾郡・埼玉郡の一郷に境ひ、大抵古隅田川を限とす、南より西を上とし、荒川を界として豊島・新座・入間・比企・横見の五郡に跨り、北は大里・埼玉の二郡に隣。

る、其大里の界は地續にて、埼玉の限は元荒川・綾瀬の二流延亘す、闐郡界より乾へ地先長く張出せり、葛飾郡の界より大里の界まで長凡十三里、横は東の方千住宿の邊まで一里半、それより西へ上れば次第に廣くなり、中央にては三里半に至り、又すばまりて大里郡の界にては繩一里半に過ず、郡界かたの如く大河の流を帶ねれば、古の地域大抵變革なきが如くなるべけれども、當國「風土記残編」當郡の下に云、東限北河越西限依田川、南限石川八幡、北限箕輪川・小名山・所七箇小岡・所七箇河・三流川・五派泉・三磯池・所九箇原・所六箇宮祠・箇所十二寺院・宇・墳墓・六基云々、爰に云る四界の地名今皆唱へを失へり、たゞ綾瀬川の邊埼玉郡の内に妻輪村あれば、妻輪川と云は綾瀬川の事なるべし、此の當「風土記」は「出雲風土記」の類にはあらで元より大寶天平の古書の體例にあらざることは世にも論なれど、正史實錄の照應あり、又奥書に文明の年號あれば、何様にも當時古書の殘簡など採輯して、綴りしものと覺ゆれば、参考に益あることは凡例にも辨せしごとななり又「風土記」の文に足立府公數二百八十二東三毛、田假栗百二十七丸、出驛用云々、當郡に府を置しことは他の所見なきことなれど、今大宮宿の邊其古蹟なりなど土人も云ひ、又古書によりて考るに、實に然るべし

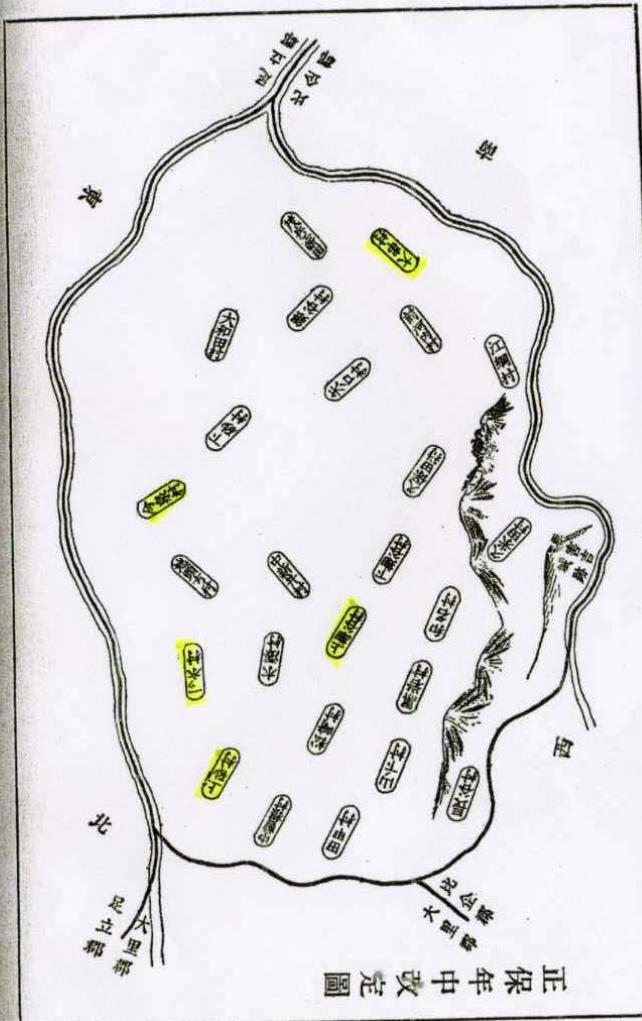




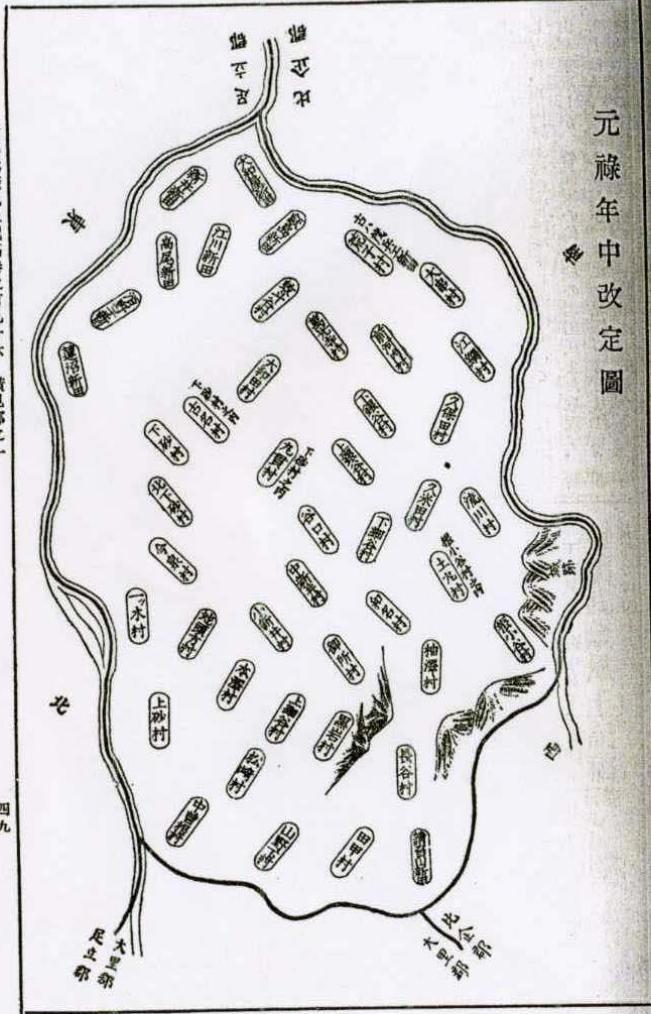
元祿年中改定圖



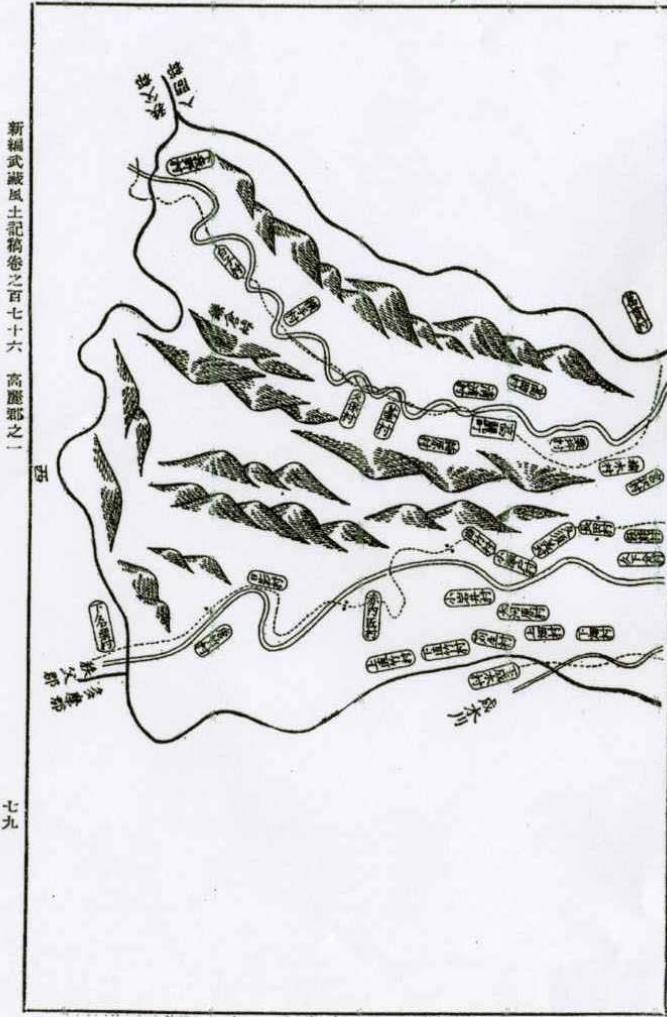
正保年中改定圖

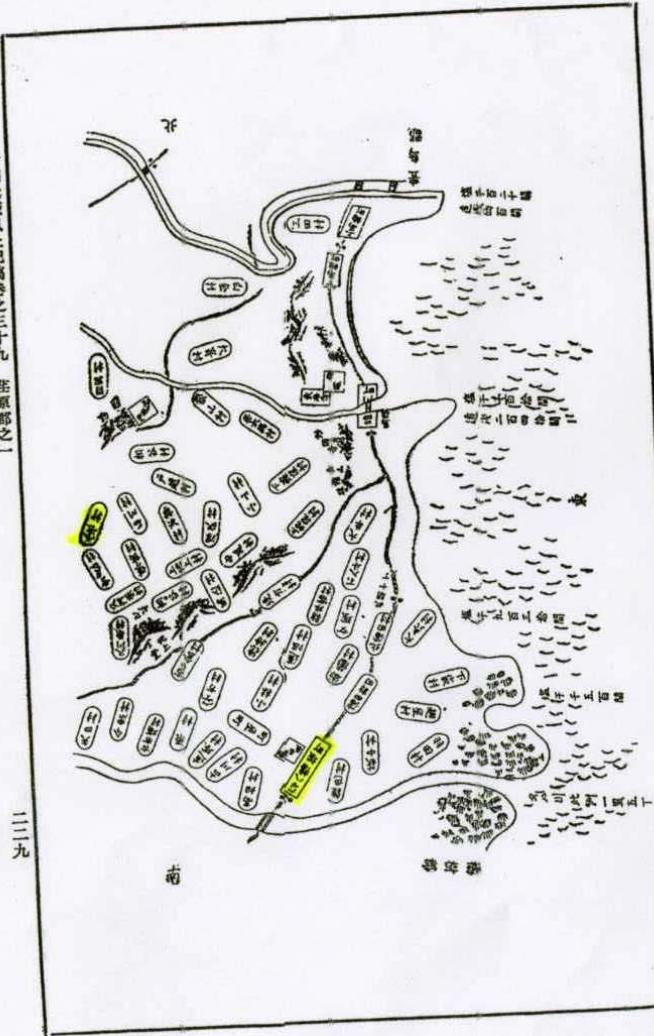


元祿年中改定圖

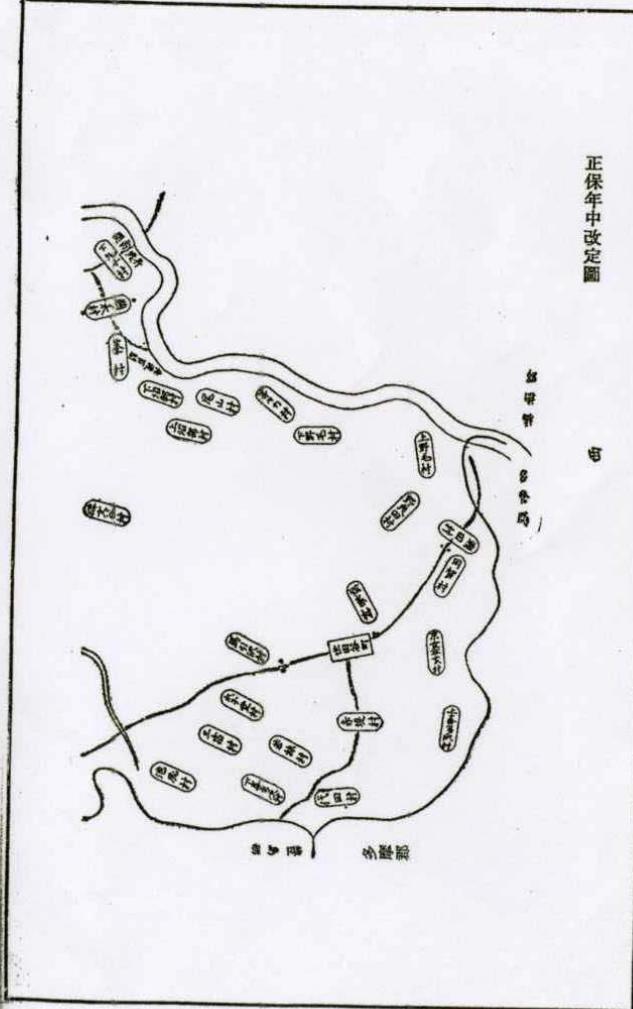


正保年中改定圖





新編武藏風土記稿卷之三十九 荒原郡之一



新編武藏風土記稿卷之三十九 荏原郡之一

新編武藏風土記稿卷之百廿九

新座郡之一

○下師岡新田 下師岡新田郡の北にあり、下師岡村の里正市石衛門なるもの開きしなり、江戸日本橋を距ること凡十一里半の行程なり、四境東は箱根ヶ崎村に隣り、西は新町村新田に續き、南は五ノ神村に界ひ、北は長谷部新田に接せり、東西九町許、南北七町に餘れり、土性野上平坦の地にして皆陸田の村たり、家數二十二軒所々に散住す、寶曆九年伊奈半左衛門檢地して貢稅を定む、開墾以來御料所にて今小野田三郎右衛門支配所なり。

新説新座郡は、「延喜式」民部省の内に始て武藏國新座と見えたり、此郡名は古へ郡鄉を定められし時より置れしや、又その後に出来しや、延喜より上づかたの事は古記にも見はれされば、その年代今より考ふべからず、又「和名鈔」新座郡の註に爾比久良と見えたれば、之にくらと稱すること古き唱なり、されば中古よりは假借して新倉とも書せり、古老の傳へたるは御入國の後までは、或は新座或は新倉と書して並行はれしが、座の字をくらと訓すること世の人耳なれざるにより、後には土人おしなへて新倉と書すに至れり、斯て新倉村の人已が村は郡の本郷よりと、金つゝことぞいへんと申して、付

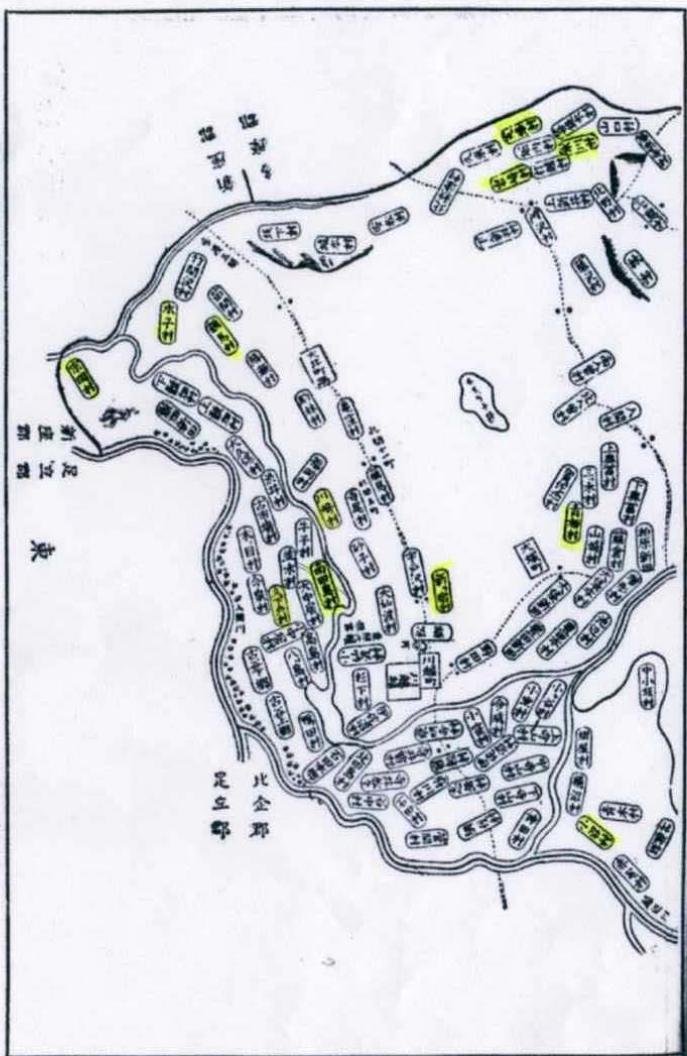
新編武藏風土記稿卷之百廿八終



正保年中改定圖

新編武藏風土記稿卷之百五十六 入間郡之一

一四二



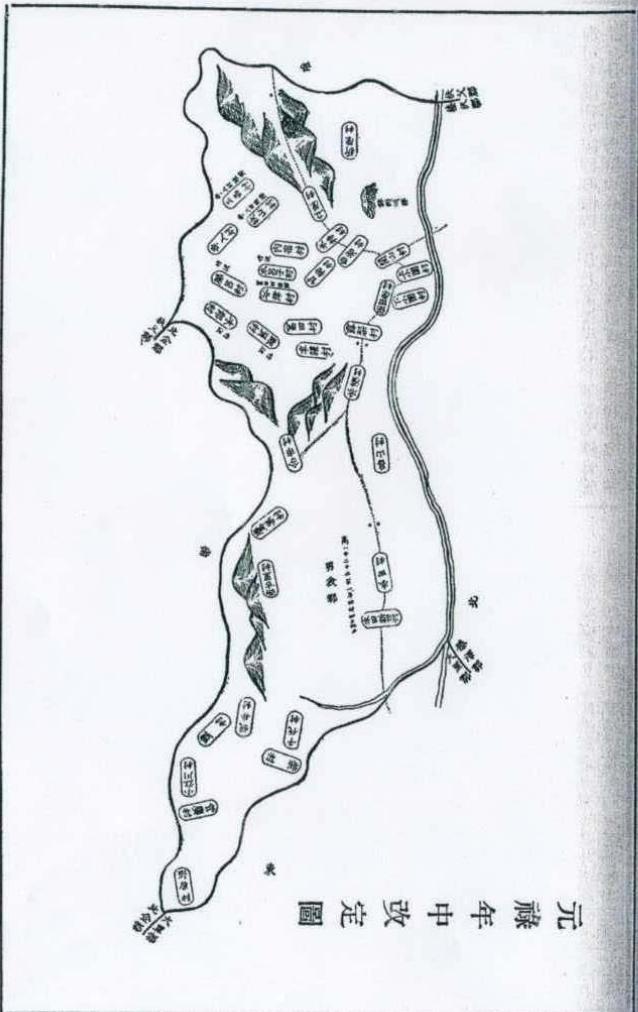
新編武藏風土記稿卷之百五十六 入間郡之一

一四三



正保年中改定圖

新編武漢縣志稿卷之二百二十二 男穀鄉之一



元祿年中改定圖

新編武藏風土記稿卷之二百二十二 男衾郡之二

正保年中改定圖



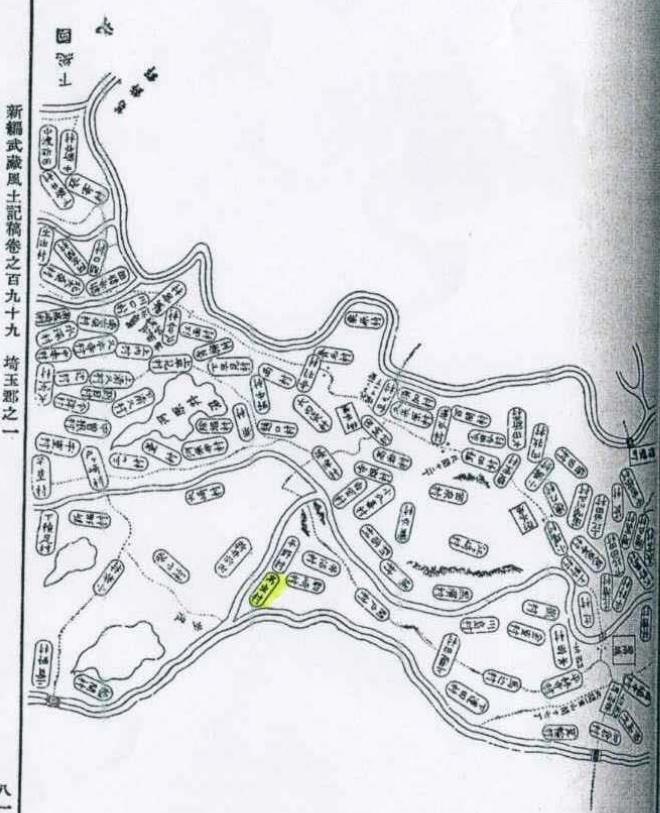
元祿年中改定圖

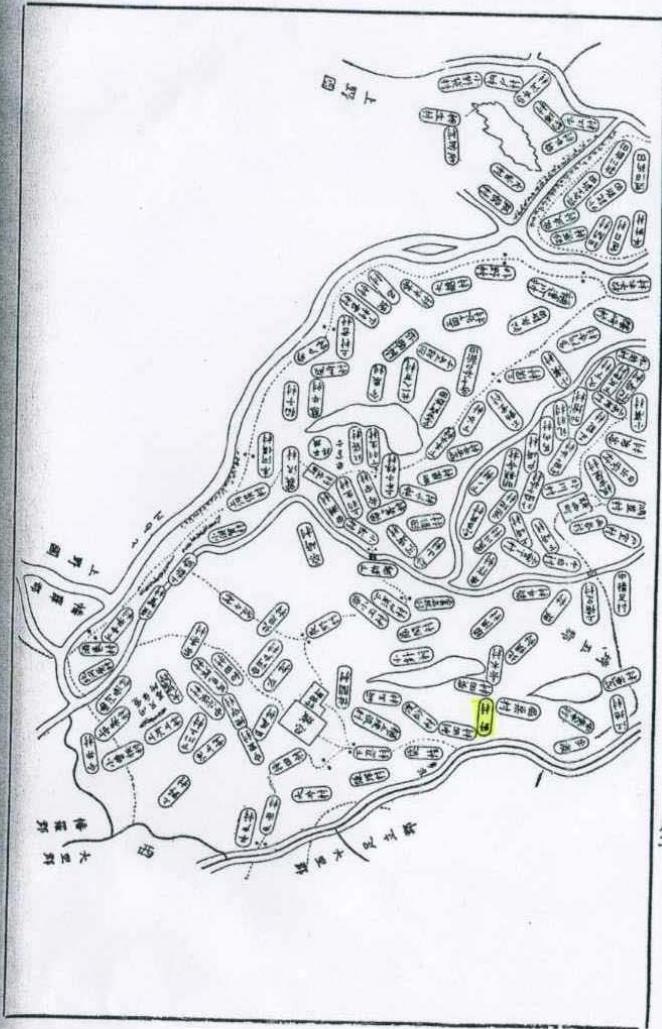


元祿年中改定圖



正保年中改定圖





元祿年中改定圖

